

第2章 プロジェクト型宿泊研修

知識や技能の習得を中心とした従来型の教育に対し、具体的な経験を重んじ、問題解決能力の育成をめざす学習は、課題解決型学習ないし問題解決学習と呼ばれる。近年日本でも PBL として紹介され大学等でも取り組まれるようになったこれらの学習スタイルは、課題ないし問題解決に重点が置かれるプロブレム・ベースト・ラーニング (Problem Based Learning) と、何らかのプロジェクトを立ち上げそれを推進する探究活動に重点が置かれるプロジェクト・ベースト・ラーニング (Project Base Learning) とがある。これらをプロジェクト型学習と呼ぶ事にする。

全ての教科活動において観察や実験、調査や分析により問題を発見し、推論・検証して問題解決に至る学習が可能であり、そのような学習方法やモデルも研究され実践されている⁸。平成 24 年度から中学校で完全実施された新学習指導要領にもその観点が盛り込まれている。しかし、一方で系統学習を欠かすことができず、入学試験との関係もあって悩ましい教科指導の現場では、授業時間の多くをプロジェクト型学習に充てることは難しい。従って、総合的な学習の時間や学校行事で取り組まれることが少なくないし、集中的な学習活動を行える点では有益でもある。とりわけ宿泊行事は魅力である。

本研究ではこのような宿泊を伴ってプロジェクト型学習を行う学校行事を、「プロジェクト型宿泊研修」と呼ぶ。これは、単なる見学や体験学習を行う宿泊行事ではなく、個人またはチームごとにプロジェクトを立ち上げ (問題の発見)、研修における様々な活動を通して仮説を検証し (推論・探究)、プレゼンテーションに導く (表現) ことで、問題解決能力を向上させることを目的として実施される宿泊行事である。

本校では3年目 (中学3年生) と4年目 (高校1年生) の時期を「学びの構築」すなわち「問題解決能力の向上期」と位置付け、1・2年目に培った探究心と基礎的なスキルをもとに、国内でのプロジェクト・キャンプ及び海外研修を実施することにした (表1)。

1節 プロジェクト・キャンプのねらいと取り組み

指導計画上の位置付け

プロジェクト・キャンプは、2泊3日の期間中、行き先や訪問先を自分たちで決め、見学やインタビューを通して問題解決をはかる宿泊研修である。クラスを数名ずつのチームに分け、チームごとにプロジェクトを立ち上げ、入念な事前学習を行い、行き先での移動計画を自分たちで立て、インタビューや見学のアポイントメントも自分たちでとる。事前学習をもとに一定の仮説 (予測) を立て、現地での調査をもとに、帰校後まとめてプレゼンテーションを行うに至るものである。

このような学習であるから、実施までに一定の協働性や自律的な活動力が身につけている必要があるため、実施学年は中学3年生に位置付けている。従って、「学びの土台づくり—基礎学力・探究心育成期」と位置付けた1, 2年生 (表1) の間に、探究心と探究スキルを育てる取組を行っている (表2)。

⁸ たとえば文献⑥など。

例えば、入学当初には総合学習で「自分プロジェクト」に取り組み、自分新聞を作る。5月の連休明けにサイエンス・キャンプを行い、里山や最新のテクノロジーに触れながら体験・発見・探究を味わう⁹。その後各自の興味関心に応じてテーマを設定し、個人 PBL に取り組む。1年の秋には地域フィールドワークを行い、学校の身近な地域で水環境と歴史、街づくりに関する校外学習を行う。その校外学習にヒントを得て、個人またはチームで PBL に取り組む。



写真3・地域フィールドワーク(四ツ谷用水)の様子

2年生では前半は自由なテーマでの個人 PBL に取り組む。夏には「共生」のテーマを掲げ、イングリッシュ・キャンプに取り組み、その成果を文化祭で発表する。秋には地域での職場体験学習を核とした一連のキャリア学習を行う。こうして2年の終わりから、プロジェクト・キャンプのための事前学習に入ることになる。

プロジェクト・キャンプのねらい

生徒には次のように目的を示している。

- ①探究学習及び探究学習のための計画・実施を自ら行うことを通して、自律性と段取り力を育てる。
- ②日常の探究活動を他地域との比較の中で発展させるなどを通して、PBLの深化をはかる。
- ③問題解決にクラスやチームとして協力することを通して、協働性を高める。
- ④さまざまな調査の方法（文献調査、フィールドワーク、インタビューなど）と資料の解析を通して、ツールを最大限に活用する力をつける。
- ⑤探究するテーマ及び方法論の海外研修への発展。

要するに、1，2年生でのさまざまな学習の土台の上に、大きな見通しを持って自ら企画・実行する自律的な力と、他者と協力して働く協働力を高めることをねらったものといえる。

実施年度・期間・行き先の概要

プロジェクト・キャンプは2011年度と2012年度に実施している。

最初の実施となった2011年度は、東北地方を「探究エリア」とし、生徒たちの事前学習と投票により、青森・秋田をフィールドに実施した。

2回目の実施となった2012年度は、後述のようにクラス人数が大幅に少なくなり、バスでの移動が費用上困難となったため、JR線を活用できるということで関東（東京）をフィールドに実施した。

期間はいずれも10月中旬ないし下旬の2泊3日である。詳細は第3章で述べることとする。

⁹ Honda 発見・体験学習プログラム。2012年度の本校の実践は、下記 URL を参照のこと。
http://eri.netty.ne.jp/hesp_repo/koshin.htm

2節 海外研修のねらいと取り組み

指導計画上の位置付け

海外研修は、7月中旬から約2週間、アメリカ合衆国モンタナ州のモンタナ州立大学キャンパスを中心に行う。本校は以前同じ場所で語学研修中心の夏期短期留学を実施していたが、実施場所は同じであるが、位置付けと内容はまったく異なる。

プロジェクト・キャンプと同様、個人またはチームでプロジェクトのテーマを定め、まず日本国内で調査を行い、仮説を立てる。これを現地での見学や観察、インタビューによる知見と合わせてまとめ、主題研究にまとめてプレゼンテーションを行うというものである。すなわち、中学3年までの土台の上に、中学3年間の学習の集大成という位置付けを持っている。

しかし後述するように海外研修では主として語学力の問題から、国内のプロジェクト・キャンプと同じように、自分たちで現地での行動計画を立てて、自由にチームでの探究を行うことは極めて困難である。そのため実際には現地スタッフとのやりとりで、様々な工夫を行うこととなった。

海外研修のねらい

如上の位置づけであるから、生徒に示した目的はプロジェクト・キャンプのそれとおおよそ共通しており、次のようになっている。

- ①プロジェクト推進にクラスやチームとして協力ことを通して、自律性と段取り力を育てる。
- ②探究学習およびプロジェクト学習のための計画・実施を自ら行うことを通して、自律性と計画力・実行力を高める。
- ③さまざまな調査の方法と資料の解析を通して、ツールを最大限に活用する力をつける。
- ④これまでの探究活動を外国との比較の中で発展させることなどを通して、PBLの深化をはかる。
- ⑤語学研修を通して英語によるコミュニケーションの意欲と能力を育てる。

付け加えれば、人々との交流を通して、地域が抱える問題を一緒に考え、「共に生きる」ということについて考えること、アメリカ合衆国の先端技術や雄大な自然との出会い、語学研修などの体験を通して、希望の進路実現に活かすとともに、国際社会の担い手としての自覚を深めることも、このプログラムを通してわれわれが期待することであり、実施前の生徒・保護者への説明でも強調した部分であった。

実施年度・期間・行き先の概要

海外研修は、現時点で第一期生が2012年夏に行ったのみである。期間は7月7日から22日、航空機のトラブルで帰国は23日となった。

行き先は上述の通りアメリカ合衆国モンタナ州で、モンタナ州立大学の学生寮に宿泊し、ミズーラを中心に探究活動を行った。

モンタナはかつて本校が語学研修の短期留学を実施していた関係で、本校教員にも過去に訪れた者が少なくなく、現地の事情がある程度いる利点がある。また現地スタッフとの長年の信頼関係から意思疎通も十分で、こちらのリクエストを率直にぶつけて対応してもらうことが可能だという利点もあった。

海外研修の詳細は、第4章で述べることとする。

3節 仮説・「協働」「自律」「活用」力を育てるプロジェクト型宿泊研修

2011年度のプロジェクト・キャンプの反省を踏まえて、また初の海外研修を前にして、プロジェクト型宿泊研修をより実りあるものとするために、われわれは次のような改善方針—仮説を立てて指導を進めることにした。

①PBLにおけるプロジェクトのテーマは、生徒自身の興味・関心により決定させるべきである。教員の Kategorizatsion によって決めるよりも、はるかに探究のモチベーションを高く維持することができる。

②学習の都合からチーム編成をする場合、教員が定めたカテゴリーによって分けるよりも、各自のプロジェクト・テーマの近似した者同士が自主的に編成した方が、学習意欲と協働性が高まる。

1回目のプロジェクト・キャンプでは、教員側から文化・自然・産業などのカテゴリーを示し、関心を持った生徒が集まってチームを編成する方法をとった。ところが具体的にプロジェクトを進める中で、なかなかモチベーションが高まらないという問題があった。一方、別の学年のPBLで、まず各人にプロジェクトのテーマを決めさせ、似通ったテーマの生徒同士が集まってチームを編成したところ、学習意欲が高く、結果的にプロジェクトの質が高まった。このことから、予め教員が示したカテゴリーによらず、徹頭徹尾生徒たち自身の興味・関心によってテーマとチームを決めさせることで、モチベーションを高く維持し、かつ協働性を高めることができると考えたものである。

③プロジェクトの取り組みは、徹底的に予測・仮説を立てて検証させる。また、必ず実際に現場に行ったり実在する人物にインタビューしたりするものとする。これらの経験によって、見通しを持って活動する力(自律)と思慮深さを育てることができる。

これまでの生徒たちのPBLの取り組みは、書物やインターネットから情報を得るものがほとんどで、アンケート調査を実施しても調査数が不十分になりがちだった。また、疑問を持ち、さまざまな方法で調査して解決することはできるものの、予測したり仮説を立てたりしてこれを検証するに至るプロジェクトは少なかった。

自律的な力を育てるには、問いを立てるところから予測(仮説)、探究、検証、問題解決という段階を踏まえた見通しを持たせることが不可欠である。また、探究の中で思考錯誤しながら答えを見出す営みが重要である¹⁰。そこで、ある程度の根拠をもって予測を立てさせ、実際に現場に行き、インタビューすることを必須とし、実施中のディスカッションにおける学びの振り返りを盛り込むことにした。

④事前学習から実施、事後まとめまでの各段階において、構想発表や中間発表、報告発表を行い、生徒同士のディスカッションを行う。これにより、自らの取り組みを要領よくまとめて他者に伝える力を育てると共に、他

¹⁰ 文献⑦に紹介されているフランスの小中学校における「すべてのわれわれの子どもたちが知らなければならないこと 知識・技能の共通基礎」の「7. 自律性及び自発性 A. 自律性」の「能力」の項目には次のように述べられている。

○論理的かつ厳密に推論することができること。すなわち次の事柄ができること。 ・問題を特定し、解決の手順を明確にすること ・有用な情報を探し、これを分析し、引き出し、階層区分し、組織化し、総合すること ・様々な教科の知識を結び付け、種々の状況においてこれを動員すること ・誤りを特定し、説明し、修正すること ・確かだと思われていることと証明しなければならないこととを区別すること 複数の解決の手掛かりを示すこと

者の取り組みから学び、自己の取り組みを見直したり確認したりする双方向のコミュニケーション力を向上させることができる。

学習の各段階において相互の発表や質疑、ディスカッションを取り入れることは、協働性を高めるために、そして互いの取り組みから学ぶために、また双方向のコミュニケーション能力を高めるために有効であると考えた。

以上の探究学習のプロセスを通して、自ら考え、討論し、問題解決能力向上に資するプログラムを構成することができると考えた。これをフローチャートで示すと次のようになる。

